

川下の風景⑨

～人生は川の流れるように～

米津 達也

【PLAN75】

早川千絵監督の映画『PLAN75』を唸りながら観た。少子高齢化社会、生産年齢人口の減少と共に、団塊の世代が後期高齢者である75歳以上に達し、医療・介護費用が膨れ上がり、高齢者世代だけでなく、若年層にも社会保障費の負担が重くのしかかる現代の日本社会を描く。そんな社会構造の苦しさを、当の高齢者に責任を押し付け「邪魔者」「社会の荷物」と扱われ、各地で高齢者の無差別暴行や殺人が行われるという冒頭の出足から、やまゆり園の事件をも彷彿とさせる。そして、政府は「PLAN75」なる施策を打ち出し、これが国会を通過。75歳に達した高齢者は自ら死を選ぶことができる、という制度が動き出す。まるでワクチン接種やマスク着用のように、これが社会に貢献できる唯一の選択であるかのように行政広報が繰り返される様相に唸りがこぼれる。そして、この選択を選ばざるを得ない人々の多くは、家族関係が乏しく、経済的に困窮し、孤独で社会に行き場のない人々が選ばざるを得ない実態を目の当たりにすると、介護業界で長く働く人間にとっては、この映画の世界は比喻やフィクションではなく、医療・介護保険制度が突き進む社会に酷似しているからこそ、これを観ながら私は唸っている。

【行方不明高齢者】

まもなく3月になろうかという週末の深夜、アルツハイマー型認知症を患う70代女性が自宅を出たまま行方不明となっている。おそらく家族が気づいたのは朝方であろう。家を出てから5時間余り、自身の名前も言えない歩行能力の高い高齢者を探すのは並大抵のことではない。奇しくも、その日の夜半から急激に冷え込み、雪が降り始め明け方には積雪となった。当然、雪をしのごとく無人の軒先や藪の中に入る可能性が高く、そうすると人員を投入してもなかなか見つからない。以前、中学生が山の林道で高齢者を見つけて声を掛けて見つかった、というニュースも見かけるが、運のよいケースだと思う。残念ながら、家族がどれだけ願っても、必死に探したからと言っても、それで見つかるというものでは無く、まさに運の絡む話だと、いくつかケースを見ていて思う。

登山道の入り口に行方不明高齢者を探すラミ

ネートされた張り紙を見ることもあるが、年月を確認すると数年前のもので、発見を待ちわびる家族や関係者の積年の願いや思いを感じる。何故こんなところに、と見つかったときには周囲がそう感じるケースも多い。今回のように冬季で冷え込んだ夜に道に迷うと、体力も気力も失われ、山岳遭難に見られるように幻覚・幻聴の中で山に入ってしまうケースもあるようだ。ひと昔前は、集落を上げて探しに出たり、少なくとも消防団や有志によって捜索隊が出ることもあったが、児童の行方不明とは異なり、マスコミもボランティアもそこまで大きく動くことがない。電車の遅延情報はニュース速報で流れるが、高齢者の行方不明は一部のメーリングリストやSNSで共有されるのみで、地域住民の多くはそのことを知らずに過ごしている。こうなってくると、そもそも地域見守りネットワークなるものが上手く機能していないと見るべきだが、なにせ認知症高齢者700万人時

代と言われる社会、あまり危機迫ったものが感じられない。都会であれ、田舎であれ、今後もこのような事件は増える。そうなると、家族では手に負えないから、認知症のある高齢者は施設や病院へとなる。私が介護業界に入ったときは、所謂、老人病院も多く見られたし、家族で介護出来ないケースの多くはそのような施設に入所していった。しかし、今は介護職員すら足りない時代である。介護に手間のかかる人は敬遠される。本当に介護が必要な人が入所できない。更に人手不足を補おうと、取り敢えずの採用を繰り返すと、十分な教育・研修が行われず、現場職員のモチベーションも維持で出来ない。結果、施設という閉ざされた空間で職員による稚拙な虐待や暴行事件が後を絶たない。

【自立を強要される高齢者たち】

自立支援プランというコンセプトにおいては、本人の「自立」だとか、意思決定を含む「自律」が必要だとか、専門職が集まって分かったような口ぶりでカンファレンスを繰り返す。しかし、そこに本人不在のことも多い。例え存在していても蚊帳の外で、そんな本人不在の自立議論をどんな気持ちで聞いているだろう。

その居室の扉を開けた時、目の前の高齢者が首を吊っている光景に見えなかった。床に膝立ちをして、何かの作業をしていると見誤った。しかし、彼はピクリとも動かない。首に食い込む紐を確認し、状況を理解したあと、119番通報をした。救急隊が到着する間、電話越しに指示を仰いだ。最初の指示はもちろん、彼の身体を床に寝かせることだった。如何に高齢者と言え、男性の身体を持ち上げることができるのか。考える余裕もなく、後ろから身体を抱きしめて持ち上げた。ま

るで凍っていた身体が割れる音が私に伝わる。身体を持ち上げても、首に深く食い込んだ紐が外れない。後ろから身体を支えながら、「自死用」とラベルの貼られた紐をハサミで切った。そして、心臓マッサージを施す。スピーカー機能にした携帯からメトロノームのリズムが聞こえ、それに合わせて胸を押し込んだ。助かる、という確信は全くないままに救急隊到着まで続けた。救急隊と共に駆け付けた警察から事情聴取を受けながら、彼の自死に至る理由を推し量った。長年一人暮らしだったが、生活の自立度は高かった。それがあきつかけで腰を痛み入院。そこから車椅子生活を余儀なくされた。長崎生まれ。原爆によって被爆した過去も話してくれた。戦後、長く工場に努め、定年後は子どもと同居していたが、家族関係が上手く行かず一人暮らしを選んだ。退院後のリハビリ、もう一度生活を再構成していこう、振り返れば私の支援が彼を追い詰めたかも知れないと思い悩んだ。理想と現実のギャップ。出来ない自分に対する絶望。先行きの不安。『PLAN75』で賠償千恵子が演じた役と重なり合う。

2024年からいよいよ地域包括ケアシステムが本格稼働する。財務省が掲げる「選択」と「集中」のキーワードが社会保障にも適用される。軽度者よりも重度者へ。リハビリとケアの限られた資源は、必要な人へと選別される。そこからこぼれる高齢者が増える。そして、全国一律のケアシステムから地方への権限委譲という名の押しつけ。地域格差が開き、不平等が起こる。これが2040年までの現実だが、自分は現場に立ちながら何ができるだろうかと思っている。その大きな宿題を突きつけられた映画のラストシーンだった。

2023.2.24 米津達也